

太田道灌蓑を借るの図に題す（作者不詳）

孤鞍 雨を 衝いて 茅茨を 叩く

少女 為に 遺る 花 一枝

短歌 七重八重花は咲けども山吹の

実の 一つだに 無きぞ 悲しき

少女 言わず 花 語らず

英雄の 心緒 乱れて 糸の 如し

孤鞍衝雨叩茅茨 少女爲遺花一枝

少女不言花不語 英雄心亂乱如絲

解説 道灌が蓑をかりた話は有名であり、このことがあつてからのち、道灌は発奮して歌道に志したといい、いかにも詩の題材としてふさわしいが、それも一種の伝説で、実話ではないらしい。

語釈 ※孤鞍Ⅱ従者も連れずに一人で馬に乗つていくこと。※茅茨Ⅱかやぶきの家。※花一枝Ⅱ八重の山吹の花一枝。少女が無言のまま一枝の花を捧げたのは、「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」という『後拾遺集』の中兼明親王の歌の、八重山吹には「実」がならぬの意をかりて、「蓑」一つさえないことを示したのである。※心緒Ⅲ心持。心の動き。

通釈 太田道灌があるとき供も連れず、一人馬に乗つて狩にいったが、途中ひどい雨にあい、ある藁屋の戸をたたいて蓑を借りようとした。すると、その家の娘が出てきて、八重山吹の一枝をさしだした。娘はそれなり一言も発せず、道灌は花を見ていても、どういう意味かいつこうに判断がつかない。さすが英雄道灌も、このときばかりは心の中が千々に乱れて、まるでつれてほどもぬ糸のようであつた。